

令和6年9月議会に提出

本年7月10日、永田町の星陵会館で「第三回慰安婦問題を巡る国際シンポジウム2024」が開催されました。ハーバード大学のラムザイヤー教授をはじめ、韓国からは李栄薫氏、金柄憲氏ほか、日本からは西岡力氏、福井義高氏など多くの識者が参加されました。

当日のプログラムと講演内容の概略を記した資料から見てくる「慰安婦問題における論争」は、新たな段階に入ってきたことを十分に理解させるものでした。資料には河野談話について「重大な欠陥がある」との指摘がされているだけです。河野談話は強制連行説も性奴隷説も認めたものではなく、単なる政治的妥協の産物です。

島根県議会の慰安婦問題の議論は、河野談話を唯一の拠り所とする「強制連行説・性奴隷説」の領域に囚われ、本質的な議論に向き合おうともしない、頑迷固陋というべきものであり、無責任であると指摘できるものです。

令和3年3月9日の総務委員会では次のような発言がありました。（詳細は本文中に記しています）

「河野談話の、旧日本軍のもんが、いわゆる従軍慰安婦という施設の設置に関与したことは否定はできないと」

このような根拠の乏しい論理性で、平成25年6月26日付で採択された“日本軍「慰安婦」問題への誠実な対応を求める請願”とこれを基にして政府に出された意見書を、再検証をすることもなく「性奴隷制」を認め続けることは我が国の安全保障を脅かすことにもなるのです。撤回もしくは無効とされる決議を求めます。

本年6月議会に提出させていただいた請願書では「強制連行と売春をない交ぜにする発言は、本質的な論点を見えにくくし、様々な弊害を惹起させるだけのものでしかない」といった趣旨の指摘をさせていただきました。

そして今回指摘させていただくのは、私共の請願書を不採択とする理由として、「政府が河野談話を否定していないから」というものです。

たとえば令和3年3月9日の総務委員会では次のような発言がありました。

「あの当時、日本の政府が、歴代の内閣が全部、河野談話の、要するに旧日本軍のもんが、いわゆる従軍慰安婦という施設の設置に関与したということは否定はできないと言っていたから、私は、否定ができないとするならば、あった可能性があったわけだ」、というものです。

何があったのかは決して言われませんが、文脈からすれば強制連行か性奴隷しかありません。

しかし河野談話は強制連行も性奴隷も、あったとも無かったとも言っていないのです。

ところが島根県議会が平成25年6月26日に採択された請願書には「性奴隷制の問題」とあるのです。

驚くべきことに島根県議会の「性奴隷制があった」という主張の論拠は「あった可能性があったという河野談話」と「強制連行させようが自分で手を挙げようが」しかないということです。

確かに河野談話は「強制があった可能性はあった」と理解できるものですが、「あった」と断定はしていません。

平成26年6月20日に日本政府から出された「河野談話を巡る日韓間のやりとりの経緯」で河野談話が強制連行を認めたものではないことが明らかとなりました。「性奴隷制」を認めたことは取り消さなければなりません。

次に「第三回慰安婦問題を巡る国際シンポジウム2024」の内容に触れさせていただきます。

ラムザイヤー教授は講演の中で「朝鮮人の慰安婦には日本の警察や軍隊に強制的に連行された女性はいなかったし、性奴隷にされた女性もいなかった」、「真実しか言わない、書かないということは学者として（いや人間として）最も重要な事である。攻撃されても、真実を言って真実を書く。妥協しない」と矜持を示されました。

「第三回慰安婦問題を巡る国際シンポジウム2024」には書かれていませんが、ラムザイヤー教授は著書「慰安婦性奴隷説完全論破」のなかで、北朝鮮が「慰安婦の嘘」を必要とした理由を記しています。

「日韓の和解を妨げようとする挺体協の真の目的は奈辺にあるのだろうか。それは北朝鮮の政治的目的を支援することなのであろう。挺体協は、慰安婦問題を政治的目的のために使っていると朴は説明する。すなわち安全保障に関する米日韓のパートナーシップに楔（くさび）を打ち込むことである。」

麗澤大学特任教授の西岡力氏は日本、韓国、北朝鮮の反日勢力がそれぞれに「慰安婦の嘘」を必要とした理由について記しています。ここでは韓国と日本についてその一部を記します。

韓国が「慰安婦の嘘」を必要とした理由のひとつとして、

「韓国側で反日日本人と手を組んでいるのは元慰安婦、元日本軍人、軍属や徴用労働者の人々だが、実はこれらの人たちはこれまで韓国内では「親日分子」「対日協力者」という眼で見られていた肩身の狭い思いをしていた。日本が戦争をするのに協力をさせられた人々であって独立運動家のように日本と戦った人たちではない。だからこそこれらの人々の日本告発はかえって激しくならざるを得ないという側面があるのだ」

日本の反日日本人が「慰安婦の嘘」を必要とした理由のひとつとして、

「日本の反日日本人らが 90 年代初めに慰安婦問題を作り上げて自国と先人の歴史を貶めたのは、ソ連が崩壊して彼らが信じていた資本主義が減びて社会主義になるという歴史観が間違っていることが、現実に証明されたからだ。歴史は資本主義から社会主義に進歩すると信じていたのが、ソ連崩壊で社会主義が資本主義になってしまった。彼らはその間違いを反省せず過去の日本の悪行を告発する反日砦に逃げ込み良心的知識人を自称した」

平成 25 年 6 月 26 日付で採択された“日本軍「慰安婦」問題への誠実な対応を求める請願”は日本共産党の関係の団体から出されたものであり「性奴隷制」を認めようとする意図があり、また、日本共産党の議員からは次の発言がありました。

「日本軍慰安婦問題は、日本が侵略戦争のさなかに植民地等で、女性たちを強制的に集め、性行為を強要した非人道的行為であり、日本政府による調査を始め司法の場での繰り返しの事実認定で、既に明らかになっている」

「性奴隷制」を認めようとする日本共産党の関係の団体が出された請願書と、共産党の議員の発言に共通するのは、前述した西岡力氏が指摘する反日日本人の姿です。

「資本主義が減びて社会主義になるという歴史観の間違いを反省せず日本の悪行を告発する良心的知識人」です。

ここで日本共産党の綱領を見てみます。

第一章には「日本共産党は（中略）民主主義革命を実現することを当面の任務とし、ついで社会主義革命に進むという方針のもとに活動した。」とあり、第五章では「日本の社会発展の次の段階では、資本主義を乗り越え、社会主義・共産主義の社会への前進をはかる社会主義的変革が課題となる。」とあります。

西岡氏の指摘が妥当なものであることは、ご理解いただけたと思います。

韓国・北朝鮮・反日日本人が「慰安婦の嘘」を必要とした理由は、納得は出来ないものの理解はできます。

しかし、島根県議会の自民党までもがなぜ、反日日本人の論理を強硬に見直そうとされないのでしょうか。

慰安婦強制連行説を認めてしまうことは、戦没者を貶め、将来の子どもたちを苦しめてしまうことは明白です。

例えたくも思い出したくもない事件に「女子高生コンクリート詰め殺人事件」というものがありました。

この事件は単なる強姦やレイプといった事件とは、その残虐性において全く異なる猟奇的なものでした。

アメリカのグレンデール市の慰安婦像の隣に設置された碑には以下の文章が入っています。

「1932 年から 1945 年の間に、朝鮮、台湾、日本、フィリピン、タイ、ベトナム、マレーシア、東ティモール、インドネシアの住居から狩りだされ、性奴隷にされた 20 万人以上のアジアとオランダの女性を記念して」

狩りだされ性奴隷にされた 20 万人の女性はどうなったのでしょうか。「殺された」という説があるようですが、性奴隷にされたあとに殺されたとなれば、それは「コンクリート殺人事件と同様の犯罪が日本人の手によって無数に行われていた」ことになってしまいます。「性奴隷制」を認めるとはそういうことです。

慰安婦像の碑に書かれた架空の説を日本人が認めてしまえば、それはやがて真実とされ世界中の良心的な世論は、憎しみの矛先を我が国に向け、日本民族に対して警戒心と敵対心を持つことになるでしょう。

今まで何度も繰り返してきましたが、河野談話は事実関係には踏み込んでいないのです。

それにも関わらず、河野談話が強制連行を認めたことにして、あろうことか「性奴隷制」などというとんでもない話に飛躍させ、それを認めようとする島根県議会の方々の真意は一体何なのでしょう。

島根県議会で、平成 25 年 6 月 26 日採択された「日本軍「慰安婦」問題への誠実な対応を求める請願」とこれを基に政府に提出された意見書の文言と文脈などを改めて精査され、これらの撤回か無効とされる決議、もしくはこれらが無効となる新たな決議を願うものであります。